

## 基調講演

座長 松尾繁樹

### 「楽しい学校歯科保健～これからの学校歯科医～」

丸山 進一郎 先生

日本学校歯科医会前会長・全国小児歯科開業医会監事  
医療法人アリスバンビーニ小児歯科 理事長



#### 【略歴】

生年月日 昭和 27 年 11 月 16 日（東京都）  
1976 年 日本歯科大学 卒業（昭和 51 年度）  
1986～ 医療法人アリスバンビーニ小児歯科 理事長  
1995 年 歯学博士  
1998～ 一般公益法人日本小児歯科学会 常務理事、理事 専門医指導医  
1985～ 埼玉県立大学・非常勤講師  
2007～ 昭和大学歯学部兼任講師（口腔衛生学）  
2015～ 日本大学松戸歯学部兼任講師（小児歯科学）  
2016～ 日本歯科大学歯学部客員教授

<主な役職> 元（社）東京都学校歯科医会 理事（1994～2006）  
元（社）日本学校歯科医会 専務理事（2007～2010）  
常務理事、理事（1997～2007）  
文部科学省・中央教育審議会・スポーツ青少年分科会専門委員（2007～2008）  
厚生労働省・歯科保健と食育の在り方に関する検討会委員（2008～2009）  
一般公益法人 日本小児歯科学会 理事 関東地方会幹事  
全国小児歯科開業医会（JSPP） 会長（2014～2016）  
前（社）日本学校歯科医会 会長（2016～2017）

#### <主な共著、監修書>

「お母さんに知ってほしい 歯と口のホームケア」医歯薬出版（1997）  
「歯と口の健康百科」医歯薬出版（1998）  
「子どものための歯・口の健康つくり」医歯薬出版（2000）  
「学校歯科保健の基礎と応用」医歯薬出版（2002）  
「もう一步踏み込もう！！学校歯科保健」東京臨床出版（2005）  
「親と子の健やかな育ちに寄り添う乳幼児の口と歯の健診ガイド」医歯薬出版（2005）（2012）  
「学齢期の顎関節診断と対応」永末書店（2006）  
「お母さんの疑問にこたえる『すこやかな口 元気な子ども』小児歯科医からのメッセージ」医歯薬出版（2007）  
「子どもの歯と口の保健ガイド」日本小児医事出版社（2009）  
「お母さんの疑問にこたえる『子どもの食の育て方』小児歯科医からのメッセージ」医歯薬出版（2011）  
「学校歯科医への提言」東京臨床出版（2015）

## 抄録

歯科医師法第一章（総則）第一条に「歯科医師は、歯科医療及び保健指導を掌ることによって、公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もって国民の健康な生活を確保するものとする。」と書かれています。これは、歯科医師は診療所の中で治療をするばかりでなく、外へ出て公衆衛生活動をすることも使命なのだ言っているのだと私は解釈しているのですが、ご存知の先生方がどのくらいいるのでしょうか？私はかつて国家試験の時は覚えていたような気がしますが、卒後すっかり忘れていました。しかし、20年前に日本学校歯科医会の役員に就いてから種々勉強する中で、改めて歯科医師の使命として再認識しました。

32年前に学校歯科医になった私たちの時代は、開業して早いうちに患者数の確保ができ、経営に不安を感じない時代がありました。しかし、昨今の現状は、開業したての歯科医師は経営が安定するのに時間がかかり、学校歯科医として診療所の外の仕事に出ていくことは不安があるようです。地域の歯科医師会で学校歯科医になりたいという希望者が少ないと聞きます。理想論かもしれません、私は歯科医師の使命を半分捨てているようにしか思えません。

視点を変えて逆から見ると、学校歯科医とは歯・口の専門医療職ですが、学校へ行くと非常勤職員として教育的な活動ができるのです。子どもたちに生涯にわたった健康価値観を育むことができるのです。私はこんなに素晴らしいことができるとは歯科医師の国家試験を受けたときは感じていませんでした。32年間にわたり学校歯科保健活動を行ってきて、子どもたちの口腔内の状況は変わってきましたし、一般家庭の生活の中で歯科保健が重要視されてきていることも実感しています。更にもう一世代したら、生活の中での価値観として歯・口の健康が更に大きくなっていくでしょう。それは生活の文化とも言える時代になるのではないかと秘かに楽しみにしています。私は“歯科はCUREからCARE、そして今、CULTUREへ”と常にメッセージを送っています。

国民すべての世代にその価値観が行きわたることが学校歯科保健の意義だと考えています。

最近の学校歯科保健のトピックスは、平成28年度の文部科学省の学校保健統計によれば12歳児（中学1年生）の一人平均むし歯本数は0.84本（男女平均）になりました。昭和59年度は4.75本であったことを考えると、学校歯科保健と小児歯科に関わってきた人間には感慨もひとしおです。

一方、歯肉炎を持つ子どもたちの割合は小学校2年生あたりから徐々に増え始め、中学生になると50%以上の子どもたちが大なり小なり歯肉に炎症を持ち始めます。その背景には、子どもたちの生活時間が大人化し、深夜化しています。また、種々の環境から受けるストレスも大人並みになっているのでしょう。思春期の難しさもありますが、メンタル面への配慮も必要なのでしょう。また、生活習慣の変化や育児環境の変化からと思われますが、口腔機能の健全な発達が危ぶまれています。

今回は、そのような学校歯科保健の課題について触れ、これから学校歯科医が求められていることについてお話ししたいと考えています。そして、学校歯科保健を通じて子どもたちに何ができるか、自分の経験をお話しし、学校へ行って子どもたちと触れることが楽しくなるような講演にしたいと考えています。